

## 第9回 これからの男性援助を考える

婚活中の女性の視点から考える

# 男性が婚活で成功する援助②

松本健輔 坊隆史

「ありのままの自分を好きになってくれる人を捜したいんです。」

上記の台詞は、お見合いで上手く行かなくなった時、また厳しい婚活の現実を知った時に、男性からよく聞かれる台詞である。前稿で女性が結婚相手として男性に何を求めているのかを論じた。一方、男性もまた希望の女性を追い求める。男性が女性に何を求めているのか、何が障害となり婚活が上手くいかないのかを明らかにした上で、本稿では、どうしたら婚活で成功できるのかを考え、そこで男性援助という視点まで何ができるのかを論じていきたい。

### 1、男性の希望条件

白河ら（2008）は、「女性経験値」の低い男性ほど女性に対するビジュアルの要求水準が高いと主張している。それが正しいかどうかは定かではないが、全体的に男性の女性への希望はとても単一的だ。お見合いパーティーでは、女性から男性への票はある程度割れるが、男性から女性の票は一極集中する。その基準はビジュアルと年齢だ。つまり、ほとんどの男性は結婚相手として若くてかわいい子、または綺麗な子を探しているのだ。結婚相談所の入会前のヒアリングでも希望を事細かく話すのは女性のみで、男性は年齢のみを条件に挙げる場合が多い。つまり、子どもを作ることを考えて20代と。後は可愛い、綺麗と思えるかどうかなのだ。

ちなみに、男性が結婚相手を選ぶにあたり、ビジュアルと年齢のどちらが優先事項かを考えると、著者の感じる限り年齢の方が重要視される気がする。著者の主観ではあるが、見合いパーティーでは美人の30代より、非美人の20代のほうが支持される傾向がある。それは著者のみならず、多くの相談所関係者が語っている。この傾向はさらに結婚を意識した結婚相談所では顕著といえる。それだけ男性にとって年齢は大きな意味を持つ。

そして、実はもう一つ男性が女性の求めている大きな要素がある。それは冒頭で示した男性の台詞だ。つまり、自分をありのまま受け入れて欲しいという女性に対する願望である。しかしそれは婚活という場面で上手く行っていない時に出る表現として以上に、交際、

結婚など今後の異性との関係を大きく左右する要因でもあるように思われる。

さらに、大切なことがもう一つある。それはお見合い後のお断りも、いざ交際が始まった後のお断りも圧倒的に女性から男性に交際を断ることが多い。そういう意味で男性は最初希望を言うものの、始まってみると、選ぶというより選ばれる立場になることが圧倒的に多いのだ。

## 2、男性は何をすべきなのか

さて、ここから本来の男性視点での話をしたい。これまで前稿で見てきたように、要求水準の高い女性に対して、男性はいかに婚活で成功し結婚へ進むべきなのか。今まで多くの著名人がそのための方略を考えている。

「婚活」の生みの親である山田昌弘は、これから男性が結婚するのに求められる能力を経済力とコミュニケーション能力だと主張している(2008)。また、心理学者の小倉知加子は結婚とは「カネ」と「カオ」の交換であるとしている(2003)。他方で、セックスという視点でも、門倉貴史(2009)は複数の統計データを用いて、男性は経済力が低いと女性とセックスすらできないことを主張している。

つまり、彼らの共通点の一つは経済力だ。しかし、婚活で成功するために経済力をつけると婚活中の男性に援助するにはあまりにも難しい時代だ。経済力をつけるという努力をしているうちに適齢期(今は私語かもしれないが)を過ぎるほど時間がかかる場合の方が多いだろう。さらに、経済力があっても婚活で失敗する男性は沢山いる。現代の女性、少なくとも婚活市場に集う女性は生活のため、お金のためと結婚できるほど割り切りはよくないようだ。そう考えると、男性が婚活を成功させるために最初に取り組む努力としては不適切な気がする。

次にコミュニケーション能力について考えたい。コミュニケーションとはデジタル大辞泉によると、「社会生活を営む人間が互いに意思や感情、思考を伝達し合うこと。言語・文字・身振りなどを媒介として行われる。」とある。端的に言うと、伝える力といったところだろう。では、伝える力を伸ばすことはスムーズに婚活を成功させるために必要なのだろうか。半分は正しく、半分は間違っているように感じる。会話が楽しかったからまた会いたいとお見合いのお返事をする女性が多い一方で、断りの理由として、「仕事の愚痴ばかりで嫌だった」「いきなり子どもが産めるかどうか聞かれた」などがよく聞かれる。彼らの伝えたいことは確実に伝わっている。伝わった上で拒否されているのだ。ちなみに他にお見合いでよく女性から聞かれる断り文句には以下のようなものが多い。「喫茶店で一円単位の割り勘を求められた」「あまりに服装がださくて。。。」「店員さんに横柄で、なんか怖くなった」。つまり、コミュニケーション以前の問題が多いのだ。振られた男性達に断られた理由を伝えてみるとみんな一様に同じ答えが返ってくる。「嫌がられる理由がよくわからない」

詰まるところ女性のニーズを把握できないことが一番大きな問題なのではないかと思う。相手が何をすると嫌な思いをするのか、その理由はどうしてなのかそこがまったく分かつ

ていないのだ。彼らの中には「自分だったら嫌じゃないのになぜ」という思いがある。そこには、男女の違いや、さらに突き詰めると個人差があるという感覚が抜け落ちている。

### 3、これからの婚活における男性支援の方向性

婚活での男性を支援は、男女の違い、個人の違いを理解する手助けをすることが根底にある気がする。それは、婚活ということに限らない。夫婦カウンセリングの場面でも根底に流れるのはまったく同じである。つまり、異性がどうしてそう思うのか分からないという場면을埋めていく作業だ。文化的であれ、生物学的であれ性差を理解し、さらにそれをマイナスからプラスに転換するコミュニケーションをすることがとても多くの問題を解決することになる。とはいえ、実行することはそんな簡単なものではない。

たとえば、著者の経験上以下のようなケースが多い。「奢って欲しい」という女性の願望は、女性からすると「大切にされたい」という精神的な欲求である場合が多いが、男性、特に奢ることに抵抗を感じる男性は「女性に負けること」「利用されている」「お金で判断されたくない」と解釈することが多い。お見合いの場面で、第一声で「子どもは産めますか」と言う男性は、結婚を考えた時に一番大切だから聞くと合理的に考える。一方、女性はデリカシーのない相手と男性を見る。夫婦の会話ではこんなことが多い。仕事の愚痴を言う妻に、夫が必死で考えたアドバイスをする。妻は「そんなこと言って欲しいんじゃない」と怒る。夫は相談されたのだからアドバイスしたと合理的に考える。そして感情的に怒っている妻に「アドバイスを素直に聞けないなら相談なんかするな」と言ってしまう、関係が悪化する。もう少し複雑な例をあげるとこういうこともある。「仕事の愚痴を妻に言うのは悪い」「男らしくない」と思って、家では会社のことを一切話さない夫。妻は夫が会社のこと、気持ちを話してくれないことを不満に感じてイライラする。結果、まったく関係のないところ、たとえば子どもへの愛情が感じられない、帰りの時間が遅いなどで喧嘩になる。夫は妻が何をイライラしているのかの本当の理由に気づかず、ただヒステリックな人と感じる。

どれも性差、個人差によって生じるすれ違いと言える。だが、実際当事者はそれが性差、個人差からくる問題と気づくことはあまりない。また、気づいたとしてもその違いがなんなのか、さらにそれを埋める方法を知らない。かくして男女ともに、関係を悪くしないためと思いつつ、関係を悪くする間違った方向での努力を続ける。自分が正しいと思うことをしていたら、相手にも通じると。

婚活の相談、そして夫婦のカウンセリングを通して、最近あることに気がついた。女性は男性に多くの物を求める。それは結婚前の高い条件であったり、結婚後の情緒的なケアであったりする。つまり、自分を幸せにして欲しいという願望だ。一方男性は、認めてくれる人を探している。ありのままの自分を許して認めてくれる人だ。相手が何かをしてくれないと男性から文句がでることは稀だ。むしろ、自分を認めてくれないこと、自分に対して不満を言うことへの不満が語られる。相手に求めることの男女の共通する点は、どち

らも受動的行為であるという点だ。しかし、どちらも受動的行為であるということは確かだが、丁寧に紐解いていくとその本質は大きな隔たりがあることがわかる。

男性援助という視点に立った時に、男性にこの違いを理解してもらい、まずは自分から相手のニーズを満たす存在になる必要があることを伝え、さらにそれが結果として相手から認めてもらえるようになるということを理解してもらい促しが必要なかもしれない。正しいかどうかは別として、未だに男性が主体的に恋愛を引っ張ってほしいというニーズは高い。したがって、婚活で成功するためには、男性が女性の気持ちを理解して、満たしていくことが何よりも重要だ。そしてそれは経済力という自身の努力ですぐ結果がでないものや、コミュニケーション能力という曖昧なものではなく、性差、そして個人差を知ること、それを元に相手を喜ばせる必要性があることを知り、実践することだと思う。さらに付け加えるならば、実践が利他的行動ではなかなか難しい。そこに自分の利益が見えるとなると状況は変わっていく。男性の利他的行為、つまり女性のニーズを満たすことで、相手に認めてもらい、受容してもらいという、実は利己的行為になるのだということを知ることとはとても大きなモチベーションになる。また男性のプライドを保つための砦にもなる。

著者は、婚活セミナーを男性にする場合、ワークを通して「なぜ女性はそう考えるのか」「違いをどうしたら確認できるのか」「そしてそこで知ったことをどう生かすのか」を実際使えることができるように援助している。不思議なほど彼らは「納得」すると実行に移す。

## 最後に

小谷野敦(1999)は、自身の著書「もてない男」の中で、もてないことは別に恥ずべきことではないと何回も繰り返し主張している。これまで、男性が婚活をスムーズに行い成功するために何が必要かを論じてきた。しかし、著者も、恋愛を好まず、結婚を望まない男性を無理矢理結婚へ向かわせるように矯正することを望んでいる訳ではない。ただ、女性と関わりを持ちたいけれど上手く関われない、そういう思いのある男性には適切な援助が必要であると思う。結婚は「自然」なことではなくなりつつある現代、より結婚をする男性への援助が求められてくるのではないだろうか。

また、本稿では著者自身が現場で感じたことを要視し、議論を進めてきた。今後、より客観的に説得力を持って説明していくために、実際の統計データをとった上で語ることを次の課題にしたい。

## 引用文献

小倉知加子(2003)「結婚の条件」 朝日新聞社

小谷野敦(1999) もてない男 恋愛論を超えて ちくま新書

門倉貴史(2009) セックス格差社会 宝島社

牛窪恵(2009)「エコ恋愛」婚の時代 光文社新書

山田昌弘・白河桃子(2008)「婚活」時代」 ディスカヴァー・トゥエンティワン